

患者との距離感大切にして 糖尿病の薬物治療に注力

腎障害の合併症視野に入れ
「腎シール」普及で患者の意識高める



菅原 秀樹
(すがわら・ひでき) 氏
調剤薬局ミッテル（福島県郡山市）
取締役調剤薬局部長（薬剤師）

Profile

2005年、東北薬科大学（現東北医科薬科大学）卒業。同年、福島県郡山市で5薬局を展開するミッテルに入社。開成店勤務などを経て、2024年7月、取締役調剤薬局部長に就任。日本くすりと糖尿学会や福島県糖尿病療養指導士会で役員、委員などを務め、自らも福島県糖尿病療養指導士、糖尿病薬物療法認定薬剤師などの資格をもつ。郡山薬剤師会理事。所属学会は前出の日本くすりと糖尿学会と日本糖尿病学会。

地元・郡山で診療を続ける著名な糖尿病専門医らとの出会いが、糖尿病治療における薬物療法に深い関心を寄せるきっかけとなりました。「主治医は患者自身」とされる糖尿病治療では、「患者と適切な距離感を保って正しい知識を伝えることが大事」と菅原秀樹氏は強調します。それによって糖尿病への理解が深まり患者自身の意識も高まることで、長期にわたる薬物治療の好転へとつながります。腎症に代表される合併症対策も糖尿病治療の喫緊の課題です。医療関係者の情報共有と患者の意識向上を目指す、お薬手帳への「腎シール」貼付という菅原氏らの取り組みに注目が集まっています。

糖尿病専門医らとの出会いきっかけに 糖尿病に関する2つの専門資格取得

役員就任前に勤務されていた開成店（郡山市開成）には、糖尿病専門医がいる診療所が隣接しています。

菅原 日本糖尿病学会認定の糖尿病専門医が複数在籍する「せいの内科クリニック」です。2006年に開業され、同じ年に開成店が開局しました。私が開成店に配属されたのは2011年で、それまでは小児科など別の診

療科目の処方箋応需の経験しかなく、糖尿病についてはほぼ知識がないような状態でした。

その菅原さんが、薬物療法を含め糖尿病治療に深く向き合うようになったきっかけは何でしょうか。

菅原 クリニックの清野弘明院長は、開院前は福島県

内では最大規模となる太田西ノ内病院（郡山市）の糖尿病センター長を務められていました。それだけにクリニックは郡山市内で唯一の糖尿病専門医がいる診療所として、太田西ノ内病院を退院した患者や難渋な患者の受け皿となって、多くの患者が受診しています。そんなクリニックの処方箋を応需するにあたって生半可な対応はとれません。薬局として、また薬局薬剤師として、患者さんへの糖尿病や治療に伴う薬物療法などについての適切な説明と対応が必須です。それができないのであれば医師や患者さんに申し開きができない。見限られてしまいます。糖尿病や糖尿病治療の薬物療法について、深く学ぼうと思った最初のきっかけです。

糖尿病関連の学会などにも積極的に参加し、薬局薬剤師として集めた様々なデータを発表する機会にも恵まれました。その頃はまだ、薬局薬剤師がそんな発表をするのはあまり多くはありませんでした。

そしてもう一方、現在、日本くすりと糖尿病学会の理事長を務められている新潟薬科大学薬学部教授の朝倉俊成先生からも大きな影響を受けました。朝倉先生は薬剤師で、清野先生と同じ太田西ノ内病院の薬剤部に勤務されていました。私が糖尿病についての学びを深めるにあたって、このお二人との出会いは非常に大きな意義があったと思っています。

「主治医は患者自身」の糖尿病治療では 患者の疾病と治療についての理解重要に

医療機関との連携など、糖尿病の薬物療法を行う上で心掛けておられることは？

菅原 清野先生は人柄も素晴らしく、診療に差し支え



調剤薬局ミッテル外観

菅原さんは糖尿病に関する2つの専門資格を取得されています。

菅原 2012年に「福島県糖尿病療養指導士」の資格を取得しました。2020年には先ほど申し上げた日本くすりと糖尿病学会から「糖尿病薬物療法認定薬剤師」の認証を受けました。

県の療養指導士は、県内の糖尿病に関心のある医師や医療スタッフを対象に、医療職としての経験が2年以上ある者を対象に試験を行い、合格者を指導士として認定しています。2024年4月現在で858名ですが開成店は殆どの薬剤師が資格を取得しています。他の店舗でも半数以上の薬剤師がこの資格を有しています。

糖尿病薬物療法認定薬剤師は2024年4月現在、全国で152名、薬局薬剤師に限っては28名とまだ少数で、福島県の薬局薬剤師では私1名になります。

ない限りアポイント無しに訪問できる関係が構築できています。その際、一般的には薬局長などの責任者が出向くことが多いかもしれませんが、開成店では患者さんを担当した薬剤師が訪問するようにしています。

どんな薬剤師が薬局に在籍し、どんな対応をしているのか、診療所のスタッフの皆さんにも直に知っていただきたいという意図からです。

糖尿病治療の“主治医”は患者自身、医師やスタッフはアドバイザーだといわれます。そのためには患者さんが病気を理解し、納得して治療を続けることが肝要で、薬局薬剤師にも患者さんとしっかり話せる関係づくりが求められてきます。

大前提は、「いかに話しやすい雰囲気を醸成するか」です。検査結果が悪くとも、患者さんが卑屈にならないよう、優しく声掛けをする。医師から生活様式を指摘され、その後薬局で、また同じようなことを言われては、患者さんは嫌気がさして服用の継続にも支障が出るかもしれません。次に向けての励まし、フォローが大切です。私がこの領域に惹かれるのは、患者さんとコミュニケーションをとり、それによって患者さんが行動変容することで状態が良くなっていくのを目の当たりにできるからです。患者さんをフォローする中で見えてくるものもあります。その上で、必要な情報は担当医にトレーシングし、情報共有を図るように心掛けています。

患者さんとの「距離感」が大事です。主治医は患者自身といわれるだけに、症状の改善は患者さんの努力によるところが大きいにもかかわらず、薬局薬剤師にも感謝の意を表される。持論ながら、薬はどこからもらっても基本的に同じですが、患者の理解度によって

効果は変わります。そして、理解してもらうためには薬局薬剤師による適切な説明が何よりも重要です。人と関わることが好きな薬剤師が、この領域には向いているのかな、と思ったりもします。

これまで患者介入したケースで好例はありますか。

菅原 血糖降下薬は複数処方されることがありますが、「同じような効果だから、この薬だけ飲んでおけばいいだろう」と、患者さん自身が勝手に判断することがあります。それを回避するには、例えば、この薬は腎保護作用があるなどの副次的な情報を含め、薬局薬剤師による丁寧な説明の他に医師の処方意図を、第三者である薬剤師がくみ取り説明することが必要です。そうすることによって服薬アドヒアランスは改善され、更に患者さんの薬に対する信頼感が増します。

また、週一回のGLP-1製剤の自己注射が困難な在宅患者さんの例では、月に一回だった薬局薬剤師の訪問を毎週に切り替え、患者さんがきっちり注射ができているかどうか、きめ細かくフォローするようにしました。訪問時の情報は主治医にフィードバックしながらフォローを続けた結果、患者さんの血糖値は確実に下がっていきました。薬局の目が届く範囲で、気になる患者さんには可能な限りのサポートができるよう心掛けてきました。

糖尿病への正しい理解啓発して スティグマ解消とアドボカシー拡充目指す

糖尿病治療では糖尿病腎症など合併症の懸念が拭えません。腎機能が低下した患者に向けた薬

薬連携の活動も積極的に展開されています。

菅原 腎機能低下者用貼付シール、通称「腎シール」をお薬手帳に貼付する運用を始めています。具体的には、医師から貼付指示が出た場合や、eGFR値が3回連続で45mL/分/1.73m²未満となった患者さんを対象に、本人または家族の同意を得て腎シールを貼付けます。これによって、患者さんに関わる医療関係者が患者さんの腎機能に関して共通認識をもって対応することができます。また生活習慣の改善や薬物治療などにおいて、シールを目安にして、それぞれの立場から腎機能を評価・チェックした情報について共有・指導することも可能になります。さらに患者さん自身にとっても、シール貼付とその意義を確認することで、自身の腎機能への意識向上を促し、病状の進行を少しでも遅らせることが期待できます。

2024年10月に宮城県仙台市で開催された日本くすりと糖尿病学会の第12回学術総会では「東北宣言」が発表されました。

菅原 糖尿病の呼称を「ダイアベティス」に変更する

ことに賛同し、糖尿病の正しい疾患概念と治療の啓発を行うことなどが盛り込まれています。

私自身も糖尿病患者に向けられる「スティグマ」（＝偏見・差別）の解消と「アドボカシー」（＝擁護・支持）活動の拡充に注力したいと考えています。

そのほか、今後取り組みたいことはありますか。

菅原 糖尿病という疾患はなくなりませんが、患者さんが過ごしやすい、前向きな疾病治療環境を構築することができればと願っています。また糖尿病治療に携わる方々を増やすことで地域に貢献していきたいとも考えています。

腎機能低下者用貼付シール、
通称「腎シール」

